

徳川綱吉の儒教的統治と中国

善書の受容について

柳 田 直 美

はじめに

- 一 館林藩主から將軍就任へ
 - 二 綱吉の初期政治
 - 三 徳松の死と服忌令・清め規定・生類憐みの令
 - 四 經書の出版と講筵
- おわりに―人とともに善を為す、中国善書の受容―

はじめに

大坂の陣（一六一四―一五）で豊臣氏が滅びてから六五年。島原の乱（一六三七）という大きな内乱の平定を経て、国内外の政權が安定し、多くの人々に泰平の世の訪れを確信されるようになると、五代將軍徳川綱吉（一六四六―一七〇九）は、それまでの武威による支配を後退させ、儀礼を重んじ、上下の秩序を重視する政策へと転換させた。¹

綱吉は將軍就任早々、將軍家年頭の行事であつた兵法初めを簡略化し、一六八二（天和二）年元日初めて御読書初の式を行い、以後この式では『大学』三綱領を講じた。² また仁政を説く儒家の思想を尊重する姿勢を示し、上野忍岡の林家別邸にあつた孔子堂と林家の家塾を移転し、一六九一（元禄四）年に「大成殿」と自ら揮毫した扁額を掲げて湯島に聖堂を創建した。³ 綱吉の儒学への傾倒は、聖堂参詣や儒学講釈だけでなく、「常憲院本」と呼ばれる儒学書の出版というかたち等でも示されている。

一六八四（貞享元）年二月三〇日、綱吉は江戸幕府服忌令を制定公布し、同年五月頃から「生類憐み政策」が始動したとされる。⁴ 同九月二日には、新將軍から大名へ領知宛行狀が交付され、綱吉は統一的知行体系の頂点に立った。⁵

他方、綱吉・生母桂昌院は、護国寺や知足院を創建し、荒廢した東大寺の大仏殿再建や法隆寺の諸堂修復に協力する等、寺社造営や修築に多額の寄進をした。⁶

この時期に国をあげて大規模な土木事業がおこなわれ「富」が循環し、急速に發展をとげた貨幣経済にともない人々の生産力と消費は飛躍的に高まり、新興商

人が活躍した。一七世紀末から一八世紀初頭にかけて上方を中心に開花した元禄文化は、この期の農村における商品生産の発展と、それを基盤にした都市町人の経済的成長を背景に展開し、⁷武威の後退を社会に浸透させつつ、文化創造の面でも画期的な成果をあげた。

綱吉はそれまで朝廷が行っていた学問技芸を重視する姿勢を示し、幕府内に新たな役職を設置して、儒学・仏教・神道・天文曆学・医学・歌学・絵画等各方面で特筆すべき多彩な人材登用を行った。⁸

本稿では、「日本社会の文明化を推進した理想主義者ではあるが小心の専制君主」⁹、或いは「ケンペルの見解によれば、綱吉は善良かつ公正、そして賢明な君主」¹⁰と評される江戸幕府五代将軍徳川綱吉という人物に注目し、その生い立ちや治世を概観する。

ところで、「善書のとく勸善懲惡の究竟の目的は、理想的な専制権力をささえる民間道德の具現」¹¹であるという見解があるが、儒学を尊重し「仁心」「慈悲の志」の涵養こそ「善」と考えて、「生類憐みの令」等で人々に「善行」を積むことを強制した五代将軍綱吉に、中国善書の影響を見ることはできないだろうか。

ここでは、徳川綱吉の儒教的統治と中国善書の受容¹²

について考えてみたい。

一 館林藩主から將軍就任へ

徳川綱吉は、一六四六（正保三）戌年正月八日に三代将軍家光の四男として、江戸城本丸大奥にて誕生した。母は本庄氏の出身で、光子（桂昌院）といい、京都二条家の家士北大路太郎兵衛宗正の娘とされる。¹³父系をたどれば、二代秀忠の孫、初代家康の曾孫にあたる。「若君」と称され、幼名を徳松と名づけられた。

家光には六人の実子があり、長男竹千代は一六四五年に元服して、大納言家綱を称し、綱吉の誕生時には世嗣として祝儀に臨んだ。徳松（後の綱吉）の兄には家綱、長松（後の綱重）、亀松（早世）の三人、姉には千代姫（尾張藩主徳川光友室）、弟には鶴松（早世）がいた。徳松は父の寵愛を受け、将軍家の男児として大切に扱われ成長した。

一歳半年長の兄長松は家光が四一歳のときの子であり、父親が四二歳のときに二歳になる子は一家一門に崇るといふ俗説を忌み、江戸城北の丸に居住する千姫（天樹院）の養子として育てられた。一六四八（慶安元）年正月、五歳になった長松は、はじめて二の丸で

家綱に直面した。翌年竹橋の屋敷を与えられ、家光の死の直前（一六五一年）に、賄料の領知として一五万石をえて、家臣も付属した。以後長松と徳松は、將軍近親として平等に処遇され、一六五二（承応元）年ごろ幕府儒医人見元徳より儒学の手ほどきを受ける。

家綱が右大臣に転任した翌承応二年八月、二人はともに従三位中将に叙任され、ついで松平の称号と家綱の偏諱を与えられ、長松は左馬頭綱重、徳松は右馬頭綱吉を名乗った。一六六一（寛文元）年閏八月には城と一〇万石の加封を受け参議に任じられ、綱重は甲府宰相、綱吉は館林宰相と呼ばれるようになるが、綱重は兄家綱に先立って一六七八（延宝六）年九月一日に三五歳で歿した。清揚院と諡号され、世嗣の綱豊（後の六代將軍家宣）が遺領を継いだ。

一六八〇年（延宝八）五月八日、四代將軍家綱は嗣子に恵まれぬまま病状が悪化し、四〇歳で死去した。將軍継承をめぐるでは、酒井忠清の有栖川宮擁立説¹⁴等が伝わるが、家綱の死の二日前に養子となっていた綱吉が後継者に決定し、江戸開府以来はじめて、武家相統法の慣例に従い、傍系親族（前將軍の実弟）による徳川將軍家相統¹⁵となったのである。

二 綱吉の初期政治

綱吉政権の初期政治は、これまでの四代とは異なり、直系以外からの將軍襲職による緊張感がもたらした。將軍となった綱吉がまず行ったことは、前將軍家綱の死去にともなう「鳴物停止令」発布であった。¹⁶鳴物停止・普請停止とは、貴人の死去に際して一定期間、歌舞音曲や普請に伴う音響、人夫による唄の唱和等を停止させ、服喪として静謐を維持させて慎むことで、停止期間が長いほど死者の権威は高いものと社会全体に認識させる効果を持った。¹⁷じつさい綱吉は養父家綱の喪に服するあいだ、減食し、外出を控え、襟を正して座し、園庭にも出ず、斎戒をして沈黙し、長話すらしなかったという。¹⁸その厳肅な姿勢は、綱吉の生真面目で潔癖な一面を示しているといえよう。

他方綱吉は酒井忠清の大老職罷免に加えて、忠清の政治権力掌握時に判決が下されていた「越後騒動」を翌年六月に自ら再審議した。当初將軍家一門の松平光長家に対して厳罰を躊躇していたが、幕府の裁定に服さない高田藩家中或いは全国に將軍「上意」の絶対性を示すために綱吉は厳しい判断を下した。「越後騒動」

を含めて、役職勤務上の過失、家中不取締り、素行不良等を理由にした処分は、前後の時期と比較しても極端に多い。このような「賞罰厳明」政策の推進を通じて一門・譜代層を圧迫し、幕府政治の主導権を握った。時代の転換期に、「生まれながらの將軍」ではない綱吉は、その重責を果たすべく武断から文治独裁の嚴罰主義へと舵を切ったように見える。

その改革は、治者を対象にしたものだけでなく、民衆に対しても統制政策が強化された。華美や奢侈に対する禁令をたびたび発して秩序を引き締めるとともに、他方では、一六八二（天和二）年二月に孝子表彰¹⁹を行い、同五月には諸国に忠孝高札を立てる等、庶民の日常倫理に踏み込んで忠孝を奨励し、価値観を転換させようとした。

一六六五（寛文五）年正月に浅井了意の仮名草子『大倭二十四孝』が刊行されるが、儒教を指針とする江戸幕府の政策が浸透してゆくなかで、孝子譚が尊ばれ、上方では、一六八六（貞享三）年刊の井原西鶴『本朝二十不孝』のようなパロディをも生み出すまでに定着してゆく。²¹

綱吉は、代始めに幕府財政の基盤となる農政を改革

し、幕領農民の疲弊と困窮を救おうと將軍就任の前後から堀田正俊を重用して勝手掛老中に任命し財政と民政を専管させた。一六八〇（延宝八）年閏八月三日、堀田正俊は「民は国之本也」という文言で始まる代官の服務規程七カ条をその官職名「備中」の名で布達した（『御触書寛保集成』一三二二）。幕領の代官に出されたこの条目は、幕府が農政に対して「儒教的理想主義をふりかざして解決にのぞむ」姿勢を示したものである²²という。小川和也氏は、この条目の内容を詳細に分析するとともに、林鶯峰が執筆した『牧民忠告諺解』²³が、四代家綱政権下の老中・堀田備中守正俊の依頼によるものであることを解明した。寛永の大飢饉をへて、一六七九（延宝七）年夏鶯峰に訳注された『牧民忠告諺解』は、「仁政」の理想を「牧民」思想におき、その国家思想の担い手を、「牧民ノ官」に見出す書物である。正俊は、幕府領の民政のありかたを模索し、君民一体を社会の理想とした。本書の成立から一年余り後、「民は国之本」条目の発布により、「民は国之本」という「高邁な理念の実現、仁政の実践は、民と接する牧民官たる」幕領の代官から始まることが広められた。²⁴

徳川家康は政権を獲得した後、一六〇二（慶長七）年一月六日に、郷村に向けて全五ヶ条からなる「定」を発令した（『徳川禁令考』二七七四号）。その第五条には

代官奉行所江、目安を再三差上、其上於無承引ハ、直目安を以可申上、左様之儀不申して、直目安上候者、可有御成敗事、附、代官之儀於非分者、直目安を以可申上事

とある。また、翌八年三月二七日に「御料并私領」の百姓に発令した七カ条の「覚」（『徳川禁令考』二七七五号）第一、二条には

一其代官領主依有非分、所を立退候付而ハ、縦其主より相届候とても、猥に不可帰事、

一年貢未進等有之者、隣郷之取を以、於奉行所二出入令勘定、相済候上、何方に成共可住居事、等とある。この二つの法令に見られる直目安や逃散の規定は、人質を取られる場合や代官に不適切な行為があった場合等には百姓に直訴、逃散を容認するというものである。武力による政権交代を成し遂げたばかりの江戸幕府は、百姓との間に信頼関係を構築し、村落に強固な支配体制を確立しようとしたと考えられる。

「徳川幕府のもとにおける『平和』とは戦国の世の終焉とともに、民百姓が生命の危機から脱し、無事に安んじて暮らせる世を意味していた」。つまり「近世国家は、こうした理念、あるいは、幻想を掲げながら、民衆に統治支配の正統性を認めさせ」るため、「人心」を掌握し、民の生活・生命を保障する平和な社会の秩序維持は、民政官に託されることになる。²⁷

若尾政希氏が指摘するように「民は国之本也」という文言は、中国古典にある言葉で、既に知られた觀念であり、「民惟邦本、本固邦寧、言人君當固民以安國也。」（『尚書』夏書「五子之歌」）や「食者民之本也、民者国之本也、国者君之本也。」（『淮南子』主述篇）等に由来すると考えられる。徳川家康が駿府城で金地院崇伝・林羅山に命じて一六一六（元和二）年に刊行させた『群書治要』²⁹にも、これらの典拠が収められている（「民惟邦本」巻二、「民者国之本也」巻四一）。

なお、堀田が代官の服務規程を発令した翌一六八一（天和元）年に綱吉は、年貢の未進問題を解決するため勘定役四人に命じ、総代官の前年度の年貢収納事務を査察させ、さらに翌年には勘定吟味役を新設して、勘定頭の補佐と勘定方諸役人の執務監督にあたらせ、

肅正により世襲代官の多くが刷新された。³⁰

鉾山からの大減収により、幕府財政を直轄領からの年貢収入に頼らざるをえなくなっていた綱吉政権では、「儒教的」理念を掲げて武士を官僚化させ、年貢を納める民衆との新たな関係を取り結ぼうとした。

官僚機構が整備されるなかで、一六八四（貞享元）

年八月二八日朝、江戸城本丸の御用部屋近くで大老堀田正俊が若年寄稲葉正休に刺殺された（『新訂寛政重修諸家譜』第十一）。「天和の治」を主導した堀田の暗殺事件には不可解な点が多く諸説あるが、³¹ 綱吉は以後大老を選任することはなく、この事件を契機に、將軍と老中との距離が引き離され、³² その結果、將軍と老中とのあいだを取り次ぐ「御側御用人」が不可欠となった。こうして綱吉の神田御殿の家臣団である牧野成貞・柳沢吉保らによる、いわゆる「側用人政治」が開始される。

三 徳松の死と服忌令・清め規定・生類憐みの令

堀田正俊暗殺事件の前年（天和三）閏五月二八日に綱吉の世嗣徳松が夭折した。数えて五歳の徳松は、綱

吉にとって唯一の男児であった。綱吉が兄家綱の將軍継嗣に決定した時徳松は館林家を相続した。徳松の死後館林城は廢城となり、³⁴ 家臣の多くは幕臣となった。殺生や血の穢、病に対してとりわけ潔癖な綱吉は、

幼少の徳松に痘疹の者や病人が近づくことを厳しく制し、徳松付の医師も任命していた。病に罹った徳松を連日のように西の丸に見舞い、親子の情愛を示した三八歳の綱吉には、自分の血筋の將軍継嗣であった一人息子³⁵を失った衝撃は大きかったであろう。それは服忌令や「生類憐み政策」に影響を与えたのだろうか。野村玄氏は「継嗣の問題は、宝永元年（一七〇四）十一月に徳川綱豊を養子にする旨を綱吉が桂昌院へ打ち明け、同年十二月に正式決定を見るまで重圧でありつづけた」と指摘する。

綱吉が徳松を弔う際に、服喪規定が明確でなかったため、翌一六八四（貞享元）年に服忌令を制定公布する契機となったという。³⁶ 服忌とは、近親者に死者があった場合、一定の期間喪に服する服喪と穢を忌む忌引のことである。

服忌令の起源は、遠く中国春秋戦国時代の経書『儀禮』喪服篇に遡ることができる。古代中国において

は、礼の中心は喪礼であるとされ、魏晉時代にその解釈が飛躍的に発展し、唐代に開元礼における五服制が確立した。³⁷日本では、死を忌み嫌い、血の穢を排する服や假、穢の有無を決することは、古く朝廷や神社における祭祀に付随する習俗であった。³⁹

綱吉政権の服忌令の制定は、堀田正俊の『颺言録』

〔服忌令始末記〕によれば、一六八三（天和三）年六月七日、將軍の「上意」が側用人牧野備後守成貞を通じて大老堀田正俊に伝えられるところからはじまった。儒者林信篤⁴⁰（鳳岡）・人見友元⁴¹・木下順庵、神官吉川惟足は、幕府に「儒家神道之服忌令書付」を差し出すよう命じられ、この他に「伊勢服忌令」「日光服忌令」「禁裏御用之服忌令」等が参照された。⁴³

貞享元年の服忌令の特徴は、親族の範囲と軽重に応じて、喪に服する日数や穢について慎むべき日数が細かく規定された条文が、諸大名らに一斉に手渡される形で公布周知されたことにある。また、親族が規定通り相互に喪に服することこそ、礼の最も重要な一面であるとする中国の儒教的な喪服制度に倣い、家族・親族間の序列を明確にすることにより、幕藩制身分階層秩序の維持強化をめざしたものと考えられている。⁴⁴

関ヶ原合戦以前には、戦で侍が敵を殺すことは武功とされ、主人の死後に追腹を切ることは美德とされた。このような武士の論理は、死穢の觀念が広く社会に浸透し、武家の儀礼のなかに服忌が制度化されるにしたがって遠ざけられた。⁴⁵

また服忌令とは別に、東照宮等の参詣に際して遵守すべき穢忌避に関する規定「清め規定」が制定された。⁴⁶近世武家法において、最も神聖で穢が及ぼされてはならないものは、徳川將軍家の始祖・東照大権現である。これに次ぐのが將軍であり、將軍の下に位置するのは、諸大名・旗本ら直臣で、その下に陪臣が置かれた。三代家光の時代から東照大権現と將軍に穢を及ぼすべきでないという考え方が成立し、幕府は東照大権現とそれに次ぐ將軍家の先祖たちの靈に穢を及ぼさぬよう細心の注意を払っていた。

貞享元年の「清め規定」では、服忌以外の触穢の規定を軽減し、産穢・血荒・流産・死穢・踏合の五項目に限定して日数も短縮した（『御当家令條』五五七号）が、一六八八（元禄元）年、日光社参や將軍家靈廟参詣には、肉食の穢、出血や灸の穢などを避ける厳しい法令を制定し、供奉する者に遵守させた（『御触書寛

保集成』九五三号)。

徳川政権は、「天道」に代わって新たな秩序を作り出し、それを固定化する「新たな人格神」として初代家康の神格化を果たした⁴⁸ことにより宗教性を獲得した。かつて寺社勢力が専有していた民の「救済」を幕府権力が担うと宣言したことで、より巧妙で緻密な支配を達成したと曾根原理氏はいう。⁴⁹

綱吉政権による「生類憐みの令」が発せられたのは、服忌令とほぼ同時期からである。この二つの法令は、その後何度か改正・追加補充された。山室恭子氏によれば、極端な動物愛護令と見做され、一面で悪政の典型とされる「生類憐みの令」は、戦国以来つづく殺伐たる「不仁にして夷狄の風俗の如き」⁵¹現状を変革するため、広く人々の心に「仁心」「慈悲の志」を涵養することを目的に、一六八五(貞享二)年七月から綱吉が歿する一七〇九(宝永六)年まで二四年間出しつづけられた。⁵³

また綱吉政権下で推し進められた「諸国鉄砲改め」では、「生類憐み」という普遍的な原理をふりかざして、関東の譜代大名や旗本・代官への「鉄砲取締り」を契機として、一国規模を支配する有力大名にも、従

来とは異なる服従を強要し、徳川政権への臣従化を徹底させるものであったと塚本孝氏は指摘する。⁵⁴

根崎光男氏は「生類憐み政策」の実施された社会的背景や当該政権の意図を丹念に究明し分析することの必要性を説き、一六一二(慶長一七)年に触れた農民取締法令のなかに、牛殺しとその売買を禁止している事例(『御当家令條』三七三号)や諸藩にはこれより古く動物の殺生禁止令が存在することを示した。「これは、その時期に日本各地で動物の殺生と食肉が広くおこなわれていたことを物語るもの」で、「仏教の殺生禁断思想および神道の穢れ思想の影響により法制化したもの」と見ている。⁵⁵

ところで、一六四七(正保四)年に出版された中江藤樹『鑑草』は、明末の善書等から女子教育のための訓話を翻訳して各話に解説文をつけたものであるが、全六一条の勅戒条例のうち、四八条を顔茂猷「迪吉録」⁵⁶(崇禎四年序刊)から採録している。この『迪吉録』には、「翟楫は牛を食べることを好み、子を生したが育たず、罪を悔いてようやく継嗣を得た」⁵⁷、「隣家の犬を殺して鷹の餌とした李壽が病に罹る」⁵⁸等の殺生訓話が収められている。

一七世紀初頭、当時の思想状況は仏教と儒教を截然と区画できるものではなかったが、経済的成長が進む明末の江南では、仏教を中心とする三教一致を説く雲棲株宏⁵⁹の始めた上方善会に代表される放生会が盛んになっていった。一方で、儒教的知識人が指導する善会、善拳という活動も活発に為された。日本では一六六〇（万治三）年に殺生を戒め陰徳を積むことを説く株宏の功過格『自知録』が翻刻⁶⁰されている。「功過格」とは、中国の民俗道徳を善と悪（功と過）に別ち、善悪の行為を点数で計算して自省を促す善書である。『自知録』では、肉食一食をやめるのは一善であり、家畜を殺すのは二十過とされる。⁶¹不殺生は株宏の畢生の信念であり、「殺事は天に逆い理に悖れば、則ち不孝不順なり」と、肉食を戒める。このような善行を行うことが、結果的に世俗の富貴繁栄をもたらすことを説く。一五八四（万曆一二）年以前に株宏が放生を勧めた『戒殺放生文』は、隠元（一六二八―一七〇六）の二偈と跋文を付す和刻本が一六六一（寛文元）年に出版された。⁶³

一六六四（寛文四）年に浅井了意は仮名草子『戒殺放生物語』を出版した。⁶⁴従来の殺生観に儒教が加わ

り、地獄譚ではなく現世での応報が中心となる。食肉を断つ以上に放生は功德があるとし、放生が殺生の罪から救われる至高の方法であると説く。「放生物語」の「五 魚鳥獸を、をびやかしたる体の事」では、動物を捕獲して殺生をすることを戒め、放生を勧め、「六 遂安公、狗を殺して、報ひし事」では、『今昔物語集』巻九・第二二と同話の都督遂安公が鷹を養うために狗を殺し、重病に罹った話を収録する。⁶⁵

また、序文に「天和四年甲子歳孟春」とある仮名草子『古今犬著聞集』⁶⁶には、生き物を殺したために不幸に陥るという殺生譚が多く収められ、殺生が子に報いるという話では、異常な病氣や死の原因を殺生に求めることも多かったようである。⁶⁷

綱吉は「館林宰相」時代には、鷹狩りを行っていたが、將軍就任後は鷹役人の大量削減をはじめ放鷹制度の縮小策を推進する一方で、「生類憐み政策」を通して人々に食犬の習俗や生類殺生という行為を改めるよう意識改革を要求し、強権を発動して徹底を期した。その眼差しは、捨子や病人等の弱者救済にも向けられている。

江戸時代の社会に多くの影響を与えたとされる中国

の勸善書『太上感應篇』や『明心宝鑑』⁶⁹は、室町時代に五山僧を通して日本にもたらされた。一四五四年に朝鮮の清州で刊行された『明心宝鑑』の序には、『太上感應篇』が引用されている。⁷⁰慶長年間には『明心宝鑑』を基にした古活字版『明意宝鑑』が刊行された。

撰者の小瀬甫庵は豊臣秀次に仕えた儒医で、秀次の死後は京都に住み、一五九七（慶長二）年に『新編医学正伝』『東垣先生十書』等の医学書を出版し、『童蒙先習』（慶長一七年跋）等を著した。⁷¹その後、一六二四（寛永元）年に金沢に招かれて前田利常に仕えた。『太閤記』（寛永二年正月序）が完成したのは豊臣家滅亡後のことであるが、甫庵は一代で異例の出世をした秀吉の悪行がその子秀頼に報いた（巻七）と説く。天が強い道徳的要請と厳正応報作用をもって人間に臨み、自らの行為の善悪の結果が自らに帰るとする小瀬甫庵にとっての「天」は、人間に忠孝仁義などの道徳的な行為やあり方を要求するとともに、行為の善悪に応じて人間に禍福の応報を与えるとする。⁷²

善書が江戸文学、思想・道徳に大きな影響を与えたことは既に様々な例を挙げて論じられているが、玉懸博之氏は、中国善書の天の観念の影響を受けて近世初

頭に勸善懲惡を施す人格的な天の働きの観念が生まれつつあることを指摘する。⁷⁴

一六三一（寛永八）年には、江南で出版された万暦版を底本とした『明心宝鑑』覆刻本が出版され、為政者や知識人に受容された。浅井了意の『堪忍記』（万治二年刊）や『浮世物語』（寛文五年頃刊）には『明心宝鑑』『迪吉録』が引用され、『浮世物語』巻五「家をおさむるつゝしみの事」にも『太上感應篇』が引かれている。⁷⁵

三條西實隆の日記『實隆公記』一四九四（明応三）年一月三〇日条に

『太上感應靈篇』上、新渡書、道家書歟、有興物也。

とあるのが史料上の初見とされ、『太上感應篇』は室町時代には渡来していた。⁷⁶江戸初期には丁巳（万暦四五年、一六一七）春唐王孫朱朝卿序をもつ林羅山旧蔵明刊本『太上感應篇通傳』（内閣文庫三二一—二五五）があり、寛永・正保頃古活字版による覆刻本も出されたが、単刊本に限らず『太上感應篇』が伝えられていることがわかる。

また『居家必用事類全集』癸集には『太上感應篇』

の経文や注解、その他にも善書によく引用される故事が並べられている。『居家必用事類』は嘉靖版が伝えられ、それを底本とした古活字版も刊行された。⁷⁸『江戸時代書林出版書籍目録集成』(以下、『目録集成』と記す)に収録する寛文年間以降の書目には、株宏『戒殺放生文』や浅井了意『戒殺放生物語』、さらに『明心宝鑑』『居家必用』等が度々見え、当時日本で一定の需要があったことが想定できる。例えば、長友千代治氏が紹介する紀州藩付家老三浦家の儒医石橋生庵の日記には、江戸滞在中の延宝八年条に

八月廿六日、『太上感應篇』を借り、十一月七日に返した

という記事がみえる。⁸⁰

また『人見竹洞詩文集』にも「居家必用跋」があり、竹洞が『居家必用事類』を目にしていたことは確実である。竹洞が跋をつけたのは一六七三(寛文一三)年京都松栢堂刊本であろう。その跋には、

故拾遺板倉重矩君、仁慈及民。其執政之日、每事欲有益于国人。曾治京師読書之余、如『無冤録』『牧民忠告』『荒政要覧』、附于書肆以鏤梓行世、或献之幕下、或示之同列官属。上則定訟撫民以

有益矣。下則於遷善改過以有益矣。其余猶有数部。一日見『居家必用』而以為此書乃有使民用。

故又命書肆以鏤之梓而未成矣。易簀之後既成。

とある。⁸¹板倉重矩が曾て京都所司代の在任時に『無冤録』『牧民忠告』『荒政要覧』等を書肆に梓行させ、またある時『居家必用事類』を見て人々に有用であると考えて書肆に命じて刊行させようとしたが完成を見ずに世を去ったと記す。將軍に献上した書物に地方行政の心得となる『牧民忠告』⁸²『荒政要覧』⁸³等が挙げられていることは注目されるが、『目録集成』には度々これらの書名が並んで出てくる。

綱吉の「生類憐み政策」に前後して、近世日本では明末清初期に拡がった善書に影響を受けた仮名草子や和刻本等が刊行された。商業出版の対象となり刊行されたものが既に存在している以上、思想史の表舞台には出ていないが、中国善書の影響が各所にあつたと考えてもよいだろう。

一七世紀半ば以降は日本の幕藩体制だけでなく、清、朝鮮、琉球等、東アジア世界は長期の非戦状態が持続する。国内外の政権が安定し、多くの人々に泰平の世を確信されるようになったこの時期に、綱吉は

「仁心」や「慈悲の志」の涵養こそ「善」と考え、法令で人々に「善行」を積むことを強制した。しかし、統治される側の庶民には、まだ体系だった儒教或いは儒仏道三教合一思想は縁遠いものであったため、綱吉が発する触れに示された未知の原理で行動規範の転換を迫られることになる。殺生をめぐる因果応報、天道思想⁸⁴と共通する「天」による禍福応報、とりわけ明末清初に生まれた「善会」「善拳」⁸⁵という観念は、人よりもまず物（生き物）に救済が向かうという「転倒」⁸⁶に対して、矛盾や違和感が生じる。それゆえこの法令は極端な動物愛護の悪法と看做され、その意図を正しく理解されなかったのでは⁸⁷ないだろうか。

四 経書の出版と講筵

「生類憐みの令」をはじめ綱吉の様々な政策は、非常に主観的で限定的なものだったかもしれないが、儒教的理想君主像を模索する一過程であったとも考えられる。儒学とは、修身から治国平天下までの道筋を知り、行動する学問である。では綱吉の理想とする儒教的君主像とはどのようなものだったのか。幕府儒官林鳳岡・人見竹洞等の登用や経書の出版、講筵について

見ていこう。

一六八〇（延宝八）年二月林鷲峰は致仕し家督を三七歳の鳳岡に譲り、同五月に没した。ほどなく四代將軍家綱が歿し、綱吉が五代將軍を襲いだ。同九月一日、綱吉は鳳岡と人見竹洞を召して、自らも参加する経書討論会を開いた。この会はその後定例化して月に二、三度ずつ開かれることになる。また別に、同九月一七日に鳳岡を召し「大学」を講釈させた。これもその後定例化して月に二、三度ずつ開かれるようになった。⁸⁹翌天和元年二月二十九日には鳳岡らに四書五経、『小学』『近思録』の読法の改正を命じた。⁹⁰

將軍の代替わりに来聘する一六八二（天和二）年の朝鮮通信使接待では、鳳岡、人見竹洞は將軍や世子が通信使に与える返翰の草案作成、老中答書の文案作成、通信使一行との詩文の贈答応酬に務めた。⁹¹天和三年十一月、鳳岡は人見竹洞・木下順庵とともに徳川家の創業史ともいえる『三河記』の校正を命ぜられ、⁹²一六八六（貞享三）年九月『武徳大成記』の名で進覧し褒賞を賜った。⁹³

かつて鎌倉、京都に開いた武家政権は禪宗をバックボーンに持ち、大陸の学問を学んだ五山の禪僧が外交

文書の作成等にあたっていた。中国的な観念では、新しい政権を発足させた徳川幕府は、前王朝の正史を編纂し、自己の政権が正統を受け継いだことを宣布する必要がある。その歴史編纂に当たるのは僧侶ではなく儒者でなければならなかった。実際、三代將軍家光の命により、林鶯峰等は幕府修史事業『本朝通鑑』の編纂を行った。⁹⁴

日本の伝統的文化の継承者であり、権威を主張する京都の朝廷は、保守的でしかも極めて閉鎖的であった。⁹⁵ 朝廷という既成の権威に対して、儒教的な原理を取り入れた江戸幕府の政策は、徳川政権の正統性創出のための施策と解される。

家康の出版に倣い、綱吉は天下人として自らの権威を示すために書物の刊行を行ったのであろう。綱吉の場合、開版が經書に限られていること、⁹⁶ 主な寺社に『四書經筵直解』を奉納したこと等が特徴的である。管見の限り、為政者が刊行した儒学經典を寺社に奉納したという例は知られていない。『太上感應篇』等の中国善書では、經典を刊行することは善行と見做されており、神仏に奉納するという点でも善行を重ねることになる。綱吉は仏典の写經・奉納と同じ様な考え方

でこれを行ったのだろうか。『常憲院贈太政大相国公実紀』元禄元年（一六八八）十一月一日条には、

四書直解ヲ新刊セシメ、一部ツ、伊勢・日光・山王・鶴岡・上野・増上寺ニ納メ玉フ⁹⁸

とある。藤井讓治氏は、翌元禄二年正月一日に京都所司代内藤大和守重頼を通じて京都北野天満宮に『四書經筵直解』が奉納された経緯を紹介している。⁹⁹ 『宮仕記録』によれば、正月五日京都所司代より北野社に呼び出しがあり神事奉行松梅院が出頭すると、將軍綱吉から「御書物御奉納なさる」との仰せがあり、鎖の符のついた二重箱が渡され、さらに奉納日は吉日である一日とするよう申し渡された。奉納されるものが「御書物」であることは知らされたが「当分開かずに置く」と指示されたため中身は明らかではなかった。一日に予定通り奉納の神事が執行され「御書物」は内々陣に納められたという。

ついで、奈良春日大社に綱吉が寄進した『四書經筵直解』¹⁰⁰（二九頁に図版掲載）について見てみよう。

『四書經筵直解』二〇卷二〇冊

縹色表紙、五針装 縦三一・二cm×横二一・五cm
刷題簽「四書直解 卷之二」

副題簽「大學／自一章／至十章」等

明李春芳總裁・郭稼討論・高拱修飾・張居

正潤色・瞿景編輯・汪旦校

卷首 万曆元年張居正等「進講章疏」

「万曆三十五年春壬正月 瀛州館重訂」

四周單辺、無封面、無界、有訓点、白口單魚尾、
每半葉一三行二三字

匡郭内縦二一・〇cm×横一六・〇cm

外箱 木櫃 内箱 素木桐箱

内箱蓋表墨書 「四書直解 二十冊」

内箱蓋裏墨書 「征夷大將軍正二位内大臣源綱吉

公／御寄附／于時元禄二年四月廿六日／春日／社

家預」

内箱の蓋裏書によれば、春日大社には同年「四月廿六日」に奉納されたようだ。本書は張居正¹⁰¹等の口語による注解（直解）がなされたもので、科挙の正統なテキストとされ一般に通行する『四書集注』とはやや異なる。なぜ寺社に奉納する経書として『直解』本が選ばれたのだろうか。まず想定できるのは、万暦三五年の重訂本は、江戸時代初期までに日本で知られていた系統とは異なる最新の本であることだが、為政者の必読

書『帝鑑図説』の撰者でもある張居正が万暦帝への進講に用いたという点も權威づけとなった可能性がある。渡来した時期は確定できないが、一六八八（元禄元）年に刊行していることから、康熙初期までの動向を反映したものと思われる。明末の天啓・崇禎期の張居正『直解』の復権は、万暦帝の時代が終焉し張居正に対する再評価が始まったこと、また、四大奇書や「三言二拍」などの白話小説が流行していた時期でもあり、口語による注釈が読者に歓迎されたことがある。既に瀛州館重訂本とは別の万暦三九年長庚館重訂本があり、国立公文書館（紅葉山文庫旧蔵本、経〇四〇〇〇〇五）や市立米沢図書館（米沢善本、七）に所蔵されている。¹⁰²『四書経筵直解』の刊行、奉納という出来事は、大陸での変化を反映して日本で漢籍が受容された一例といえる。

いずれにしても、神宮文庫本・内閣文庫林家旧蔵本¹⁰³・北野天満宮本・春日大社本『四書経筵直解』は同版であろう。本書はどのような意図で奉納されたのだろうか。先に挙げた石橋生庵の日記には、同じく江戸滞在中の延宝八年条に

七月十日、江陵張居正四書直解を松田氏に借りた

とあり、綱吉の奉納以前に既に中国刊本が渡来し江戸では借閲して拡がりつつあったことがわかる。張居正『四書直解』は、講筵での解釈を取めた新渡の唐本として珍重されていたのではないか。福井保氏の『江戸幕府刊行物』には京都出雲寺和泉掾松栢堂の後印本¹⁰⁴が注記され、『目録集成』には、元禄五年の『広益書籍目録』及び同九年、宝永六年の『増益書籍目録大全』に『四書直解』として挙がっており、後に版刻して販売されたことがわかる。

ついで一六九〇（元禄三）年に刊行した『四書章句集註』二六卷二六冊（内閣文庫二七六―四三）は、『常憲院本四書集註』『御板集註』とも呼ばれ、林家改正点を付し、殿中聴講用に出版したものとされる。本書は聴講用の小本とは別に、中本二六冊（『右文故事』巻六）、柳沢吉保拝領の特別大型本（長澤規矩也『図解和漢印刷史』五四頁）があったらしい。¹⁰⁵『常憲院贈太政大相国公実紀』元禄三年八月二一日条に

執政、執事等ノ為ニ大学ヲ講シ玉フ、是ヨリ毎月一次、順次ニ四書ヲ講シ玉フ

とある。同年七月湯島に聖堂を建てるのが決定し九月には、綱吉自ら文武併用が政道の定理であるのだから

ら学問に励むよう諸役人を集めて訓示している。

一六九三（元禄六）年刊行の『周易本義』（内閣文庫紅葉山文庫旧蔵本六六―二）は、題簽に「周易本義林家改正点」とあり、林鶯峰が点を加えて寛文四年に刊行した本に基づき、鳳岡が点を改正したもので、『常憲院本周易』『御版周易』とも呼ばれ、綱吉の講義聴講用に開版したとされる。本書には小本と中本があり、携行の便を考慮した「小本八冊」（『右文故事』巻六）は元禄六年の初印本で、「中本八冊」は出雲寺和泉掾の同版後印本であるという。¹⁰⁶『常憲院贈太政大相国公実紀』元禄六年四月二一日条には

御座間ニテ周易本義ヲ講シ玉フ、今日御開筵ニテ、周易上経ト云所ヲ講シ玉フ、是ヨリ毎月六回講筵ヲ展ヘ玉フ、八ケ年ヲ経テ終ル、近習ノ諸臣ハ言ニ及ハス、諸大名、高家、諸番頭、諸物頭、諸役人ヨリ天下ノ寺院、社人等ニ至ルマテ、願ノ者ハ皆拝聴ニ預ル。

とあり、また『常憲院殿御実紀附録』巻中にはいさ、か好学の志ある者は、皆ねがひのまに拝聴せしめられ、八年をへて、十三年の十一月廿一日まで、二百四十座にて御卒業あり

とある。綱吉が熱心に講義を家臣に拝聴させるのは「面々学問心掛け、自分の行迹あひ嗜み、仕置きのためと思し食され」（『御当家令條』四一二号）てのことであつたらしい。

刊年不詳の『旁詠五経』は、易经・書経・詩経各二卷、春秋・礼記各四卷一冊とされるが、そのうち易经二卷・書経上卷の三冊が国立公文書館（内閣文庫本二七五―二四八）に見える。「官板」と題簽に標示したのは、江戸幕府刊行物のなかで本書が最初である。¹⁰⁸

なお、綱吉が手許に置いて携行し、自筆の点や訂正を書き込んだと思われる明版「四書」が徳川宗家に伝来した。¹⁰⁹箱書に「常憲院様御筆入四書」とあり、木箱には小型本に仕立てられた『四書集註』二冊と使い込まれた裂の書袋が収められていた。縦一五・〇cm×横一三・六cm、版式は四周单边白口、每半葉九行十七字、無界、無魚尾で、巻末に「崇禎壬申（崇禎五年、一六三二）年孟春月江坤輿梓」の刊記がある。¹¹⁰

おわりに

——人とともに善を為す、中国善書の受容——

綱吉は一六八八（元禄元）年より三年間、孔子の誕

生日に家臣を引きつれて上野忍岡にある林家別邸内の孔子堂に参詣した。当日は講書があり下賜物があつた。これは供をつれての頻繁な御成のスタイルと通じる面を持つという。¹¹¹それはまた、多くの家臣を集めて行つた儒学講筵とも通うのではないか。或いは供をつれて行かう鷹狩りの代替行為と見ることはできないか。元禄四年に湯島聖堂が完成し、綱吉の儒学興隆策は大きな展開をみせた。

綱吉の家臣邸への御成については、「既に將軍の權威・権力の絶対化、専制が確立され、安定したのちの行事」¹¹³とされる。柳沢吉保邸への御成は五八回を数えるが、最初の御成は元禄四年三月二二日である。

大石学氏は、初回は①御成の予告とともに、柳沢家で準備をはじめたこと、②御成には、幕閣・側近・僧侶などが多数供をしたこと、③綱吉と柳沢一族との間で謁見や贈答が行われたこと、④綱吉と、吉保・柳沢家家臣たちの間で、学問や芸能の交流があつたこと、⑤綱吉と柳沢家家臣との間でも、謁見・贈答が行われたこと、等の諸点を確認し、第二回以後の御成では、⑥柳沢家関係者への婚姻の指示、⑦三奉行による裁判の視察、⑧幕臣の人事・褒賞、⑨柳沢家家臣の幕臣へ

の登用等も行っていると述べた。御成は綱吉と側近およびその一族・家臣との学問芸能の交流、人材登用、人脈形成・強化の機会であり、さらには褒賞や人事、奉行らの訴訟処理の実態を視察する機会でもあった。とくに、学芸に秀でた柳沢家臣団は、貴重な人材登用の供給源でもあったと見る。¹¹⁴

また、外出先から立寄ることの多かった牧野成貞邸への御成は三三回を数えるが、そのうち二八回は桂昌院や御臺、鶴姫等を伴ったものである。一六八八(元禄元)年五月を嚆矢とする牧野邸への御成を分析した大橋毅顕氏は、①成貞の家が綱吉一族と関係が深かったこと、②御成は、綱吉および牧野一族との学問や芸能の交流、人材登用の機会となっていたこと、③御成の準備段階においては、御殿普請をした大工の棟梁、祈禱をする僧侶、装飾には奥絵師の狩野派等多くの人が関与し、当日は予参に約一五〇名、綱吉のお供に約二五〇名、牧野家側も含めると四〇〇名以上が関与したこと、各所から多くの祝儀が届けられたこと等を指摘した。¹¹⁵ 綱吉は他に本庄宗資邸や松平輝貞邸等、家臣の邸にたびたび御成している。

このように儒学講筵や御成等を通して積極的に家臣

らと学問や芸能の交流を図った綱吉に、明末清初にうまれた善会や中国善書の影響を見ることはできないだろうか。例えば、虞城県で同善会を創始した楊東明はその書翰の中で、講学会を結成して「人とともに善を為す(『孟子』公孫丑上)」¹¹⁶ことは、友人と切磋琢磨して学問研究と自己陶冶に励むことであり、こうすることによって善人が多くなることを願うからでもある、と述べる。¹¹⁷

当時日本では、長崎貿易や明末清初の禅宗僧侶の渡来が中国善書の流入に大きな役割を果たしていた。上方で盛んに出版された仮名草子には善書に典拠を持つものも多いが、既に述べたように和刻本『戒殺放生文』には隠元の偈が付されている。隠元の渡来は一六五四(承応三)年七月のことで、鄭成功の仕立てた船で二〇余名を随従させ長崎に到着した。黄檗文化の輸入はここから始まるといわれている。¹¹⁸

四代將軍家綱は一六五八(万治元)年に隠元を引見して山城国宇治に寺地を与え開堂を許可した。隠元は一六六一(寛文元)年に創建された黄檗山万福寺の開山として迎えられ、黄檗宗は諸大名等の招きにより各地に拡大していった。なかでも後水尾院や近衛基熙・

家熙父子はその定着、発展に大きな役割を果たした。¹¹⁹

一六七九（延宝七）年には幕命により石清水八幡宮放生会¹²⁰が復活した。浄土宗の学僧忍澂（一六四五～一七一）は、石清水八幡宮の神人今橋安貞という者を誘って毎月放生会を行い、人々に屠殺や漁獵を諷めたという。忍澂は元禄十四年版『陰陽録』・『自知録』合刻の際、親交のあった黄檗宗の独湛（一六二八～一七〇六）から教えを受けている。

人見竹洞の父元徳は招かれて江戸に行き、家光の息女千代姫を治療し、家綱の侍医となる。『神田記』によれば家綱・綱吉兄弟に儒学の手ほどきをしたらしいが、すでに京都には明から渡来した黄檗の影響があり、正統な朱子学のみを学んだわけではないだろう。中国善書と儒医は近いところにおり、儒者と医者とは博学の知識人として近い関係にあった。善書には薬の処方を附録している例もある。

株宏の『戒殺放生文』の出現によって明末清初に流行した放生会（放生社）は、何よりも生命を尊重した。¹²³ 一六三六（崇禎九）年に疫病が大流行した折、「放生社」という魚を救済する結社が、薬局という人間救済のための結社に移行している。これは「民

を仁み、物を愛する意図からである」と述べる。¹²⁴

中国では生生たるべきものは、まさしく天地であり、万物であった。放生会と同善会が流行した時代は、儒仏が混合し、仏も儒も、僧も俗も、士も庶も、世を挙げて生生を唱えた時代であった、と夫馬進氏はいう。¹²⁵

「武威」によって支えられ、超越的な道理の支えを持たない江戸幕府の「御威光」の支配の脆さ¹²⁶を五代將軍綱吉が自覚していたかどうかはわからない。しかし、綱吉は「武家之天下」の主宰者として、外間を意識しつつ「以前の政權とは一線を画し、天皇の下にあった機能までも包摂した国家全体の統治に努め」、¹²⁷ 仏教と儒教の両立をめざし、「生類憐みの令」¹²⁸を發布して生命を尊重し、「社会福祉」につながる側面をもつ政策を実施した。その意図を示すかのように、一七〇二（元禄一五）年九月二二日、綱吉は最も信頼する側近かつ学問の弟子柳沢吉保に「観用教戒」という一篇を与えた。

釈迦と孔子の道は、慈悲を専らとし仁愛^{もと}を要め、善を勧め悪を懲らしめ、真に車の両輪の若く、最も篤く恭み敬うべき者也。然れども仏道を学ぶ者

は、経録の説に泥み、君を離れ親を遺て、出家遁世して其道を得んと欲す。此の如くすれば則ち世將に悉く五倫を乱すに至らんとす、是れ恐るべきの甚しき也。儒道を学ぶ者は、経伝の言に泥み、祭或は常の食に禽獸を用い、是を以て萬物の生を害するを厭わず。此の如くすれば則ち世將に悉く不仁に至りて夷狄の風俗の如からんとす。是れ恐るべきの甚しき也。儒仏を学ぶ者は、其の本を失うべからず。¹²⁹

仏教と儒教の道は慈悲を専らとし仁愛を要め、善を勧め惡を懲らしめることであり、車の両輪の如くともに欠かせない最も恭敬すべきものと記されている。¹³⁰これは儒仏道三教融合を説く中国善書思想とも符合するのではないか。仏教については今後の課題とするが、儒学については、筆者はつぎの一文に注目したい。

天より下民を降して、そが君としてそが師とすといひしは、かの堯舜、禹湯、文武などいひしあがりての代の聖王の事をいひしにて、唐国にても、後の代となりてはさることも聞えず。君と師とは、はるか異なるものに成行し、当代御みづから講説ありて、遍く天下の者に教諭なしたまひし

は、実に御一身もて君師の職を兼させ給ひしと申べけれ。いつの頃にや、近臣等が御講書承りし後に、御辨の雄英におはしますと、義理の詳晰なるとは、並々の儒者等が、おさおさ及ぶ所にあらずと評し奉るを聞しめして、汝等儒学を何と心得たるや。いにしへの堯舜、禹湯、文武などいひし聖人たちは皆儒者なり。今のごとく読書をもて業とする者のみを儒といふは後世の事にて、大なる誤なり。是は務めて聖人の道を狹隘にするなりと仰られけり。このこと伝へ承りしもの、その御論の高確なるに感じ奉りけり。又世に伝へしは、いつも御講書の終には、此上は各の心得にある事なりと仰られしこと、常例のごとくにてありしといふは、是も人々に躬行実践の道をしらしめんとての御事なるべし。¹³¹

將軍綱吉にとつて、儒学とは「聖人の道」であり、朝廷の權威に対抗して徳川政権が儒学を儀礼化し独占することによって、新たに文化的覇權を握り、自ら「君師の職を兼」ね、人々に「躬行実践の道」を知らしめようとした、とみられる。

他方、「生類憐み政策」等に目を転じると、現時点

では、情況証拠に依拠せざるをえないことも少なくないが、綱吉には中国善書の儒家的善惡応報思想の影響があつたのではないかと考えられる。

註

- 1 高埜利彦『元禄・享保の時代』（集英社、一九九二）一二七―一二九頁。高埜利彦『元禄の社会と文化』（同編『元禄の社会と文化』吉川弘文館、二〇〇三）五二頁。
- 2 『常憲院殿御実紀』（以下『御実紀』と記す）巻五（『新訂増補国史大系 徳川実紀』（以下『徳川実紀』と記す）第五篇、吉川弘文館、一九七六、四三五頁）。
- 3 『御実紀』卷廿三、二月二日条（『徳川実紀』第六篇、九八―一〇〇頁）。
- 4 『御実紀』卷九（『徳川実紀』第五篇、五〇八頁）。
- 5 根岸光男『生類憐みの世界』（同成社、二〇〇六）七四―七九頁参照。山室恭子氏は「あるいはこの少し前にも同趣旨の通達が出されていたのかもしれないが」、貞享二年（二六八五）七月一四日江戸の町に一斉に触れ出された指示（『江戸町触集成』二三五六号）を「現在知られる生類憐れみ関連法令の第一号」とみる（『黄門さまと犬公方』文芸春秋、一九九八）一一九―一二〇頁。
- 6 杣田義雄『元禄の東大寺大仏殿再興と綱吉政権』同『幕府権力と寺院・門跡』（思文閣出版、二〇〇三）。
- 7 竹内誠『天系日本の歴史⑩江戸と大坂』（小学館、一九九三）五〇頁。
- 8 「ひとり儒生のみにも限らず、道々の才藝ありて、用に立べき者も多く拔擢せられけり」、淀川河口の治水工事に河村瑞賢を用い、天文方に浜川春海、歌学方に北村季吟父子、神道方に吉川惟足、幕府御抱え絵師に狩野家以外の住吉具慶を召出し、遍く登用した（『御実紀附録』巻下（『徳川実紀』第六篇、七四九・七五〇頁））。
- 9 塚本学『徳川綱吉』（人物叢書 吉川弘文館、一九九八）二九七頁。
- 10 ベアトリス・M・ボダルト＝ベイリー著、中直一訳『ケンペル―礼節の国に來たりて―』（ミネルヴァ書房、二〇〇九）一六六頁。
- 11 酒井忠夫『増補中国善書の研究上』（国書刊行会、一九九）二九八頁。
- 12 善書とは儒仏道三教にわたった勸善書の略で、民衆の生活規範の書。その善行の内容は、「君には忠義、親には孝、兄弟たがいには仲良くし、自分を正して人に教え、みなしこ・やめ・老幼を憐み、恵み、なつかせて、虫も草木も諸々もなお損なわじと心せよ」等と記す。
- 13 『御実紀』卷一（『徳川実紀』第五篇）三三三頁。
- 14 「從來から各種の歴史書に忠清の宮將軍擁立説がまことしやかに記述されることが多いのだが、その内実を示す確実な史料は見出せず、推測の域を出ないのが現状」（根岸光男『生類憐みの世界』一四―一五頁）、「当時の江戸幕府

- の政治体制からみて、宮將軍の実現性はかなり低い」(福田千鶴『徳川綱吉』山川出版社、二〇一〇)一七―二二頁等を参照した。
- 15 深井雅海『日本近世の歴史3 綱吉と吉宗』(吉川弘文館、二〇一二)。
- 16 高埜利彦前掲註1書『元祿の社会と文化』四八頁。
- 17 中川学『近世の死と政治文化―鳴物停止と穢―』(吉川弘文館、二〇〇九)第一部。
- 18 堀田正俊『颯言録』(堀田正久『堀田家三代記』新潮社、一九八五)。
- 19 『御実紀』巻五、三月十二日条(『徳川実紀』第五篇、四四〇頁)。「鳳岡林先生全集」巻一〇九に、「孝子今泉村五郎右衛門傳」(天和三年癸亥季秋)が収められる。また、天和二年六月、五郎右衛門は江戸に来て綱吉に拝謁した(勝又基『落語・講談に見る「親孝行」』NHKカルチャールジオ文学の世界、二〇一三年三月を参照)。
- 20 『御実紀』巻五(『徳川実紀』第五篇、四四九頁)。倉地克直『徳川社会のゆらぎ』(全集日本の歴史 第一一巻 小学館、二〇〇八)三七―三八頁。
- 21 濱田幸子『西鶴『本朝二十不孝』と二十四孝』(『佛教大学大学院紀要』文学研究科篇 第三七号、二〇〇九)。
- 22 辻達也『享保改革の研究』(創文社、一九六三)三五頁。
- 23 林鶯峰『牧民忠告諺解跋』には己未(延宝七年)之夏と注記がある。林鶯峰『鶯峰先生林学士文集』(べりかん社、一九九七)巻一〇四参照。
- 24 小川和也『牧民の思想 江戸の治者意識』(平凡社、二〇〇八)。
- 25 定められた手続を踏まず直接に上級の権力に訴え出ること。近世初頭には特別の事情がある場合は認められていたが、訴訟法の整備により禁止された。
- 26 中世以降の農民闘争の一形態で、領主への抵抗手段として、一村を挙げて耕作を放棄し、山野や他領へ逃亡したこと。鎌倉幕府は関東御成敗において、年貢皆済後の百姓の逃散が認められるので、江戸幕府もその規定を踏襲していた(保坂智『百姓一揆とその作法』吉川弘文館、二〇〇三、七二頁)。
- 27 小川和也前掲註24書一三―一八頁。
- 28 若尾政希『「太平記読み」の時代』(平凡社、一九九九)第七章「幕藩制の確立と民衆の政治意識」。
- 29 唐太宗が魏徵等に命じ編纂させた政治の参考書。『論語』『老子』『史記』『漢書』等六〇以上の文献から治世の参考となる語を抜粋し、六三一(貞観五)年成立。中国では早く失われ、後にわが国から逆輸入された。家康は一六二六(元和二)年一月に刊行を命じるが同四月一七日に歿。五月下旬に版は成るが、家康は完成した駿河版『群書治要』を手にすることはできなかった。
- 30 村井淳志『勘定奉行 荻原重秀の生涯』(集英社、二〇〇七)第三章。
- 31 大野瑞男『江戸幕府財政史論』(吉川弘文館、一九九六)。

- 32 小川和也『儒学殺人事件 堀田正俊と徳川綱吉』（講談社、二〇一四）三二～九二頁。
- 33 深井雅海『図解・江戸城を読む』（原書房、一九九七）。
- 34 佐藤孝之「徳川綱吉藩主時代の館林藩」（特別展『徳川綱吉 館林城主から將軍へ』館林市教育委員会、二〇一四）。
- 35 野村玄『天下人の人格化と天皇』（思文閣出版、二〇一五）第二章 元禄・宝永期の徳川綱吉と「かけまくもかしこき日のもとゝの国」。
- 36 根岸光男前掲註5書七八頁、福田千鶴前掲註15書四四頁。
- 37 魏晋時代に、經書の現実的な解釈を必要とする社会的な要請から、理論的に整合性のある普遍的な礼が求められ、礼制の整備・改革が進められた（古橋紀宏「魏晋時代における礼学の研究」博士論文、東京大学、二〇〇六）。
- 38 五服とは服喪制度の用語で、死者と生者の親疎関係によつて斬衰・齊衰・大功・小功・緦麻の五種に大別され、さらに服の期間によつて細分される。
- 39 林由紀子『近世服忌令の研究』（清文堂、一九九八）三～一二頁。
- 40 一六四四（寛永二〇）年林鷲峰の次男として江戸に生まれる。名は戀または信篤、通称は春常ほか。一六六六（寛文六）年九月英才教育を施された兄春信（梅洞）の急逝を境に、林家の家業を受け継ぐ立場となり、学問に励み『本朝通鑑』の編集等にも力を発揮するようになる。一六七二（寛文一二）年二九歳で法眼に叙される（『鳳岡林先生全集』及び揖斐高「林鳳岡論―守成の憂鬱」「文学」第二二卷第三号、二〇一一）。
- 41 一六三七（寛永一四）年人見元徳の長男として京都に生まれる。諱は節、通称は友元ほか。竹洞（友元）の曾祖父道西は、五山文学者で遣明使となった周良策彦に随行して北京に行った。祖父友徳の代から京都に移住し医者となり、父の兄弟五人のうち、早世した長男と水戸藩の儒者になった次男ト幽を除く三人は高名な医者になった。父元徳は一六二一（元和七）年に東福門院所生の豊宮を診察し法橋に叙任され、一六三七（寛永一四）年三代將軍家光の息女千代姫を診察するため江戸に召され、江戸城のすぐ近くに邸宅を与えられた。元徳は生来虚弱な世子家綱の侍医となり、竹洞は家綱の御伽となった。一六四八（慶安元）年に竹洞は林羅山の門人となり、羅山の次男読耕齋に師事した。一六五三（承応二）年羅山に同行し読耕齋とともに日光大猷院廟に参拝する。一六五八（明暦四）四月に医学修行のため京都に留学し、江戸に戻つてからは本格的に医者としての活動を始めたが、読耕齋の急死により一六六一（寛文元）年閏八月竹洞は、林家以外では最初の幕府儒者となった（『人見竹洞詩文集』及び山本巖「人見友元小伝」宇都宮大学教育学部紀要 五四 第一部、二〇〇四）。
- 42 『御実紀』巻六（『徳川実紀』第五篇、四五五頁）。天和二年七月二八日に木下順庵は直参となり、幕府の儒者になった（『先哲叢談』巻三、平凡社、一九九四）一四一頁。

- 43 貞享元年の服忌令制定は、「服忌令混雑付而可相改上意」〔服忌令始末記〕とあるように、従来あったものの改正であると幕府は認識していた（林由紀子『近世服忌令の研究』）。
- 44 林由紀子前掲註39書四八頁。
- 45 高埜利彦前掲註1『元禄の社会と文化』五八・五九頁。
- 46 「穢を避けて清浄を保つこと」を当時「清め」と称し、これに関する法令を集めた部分を「武家厳制録」や「教令類纂」などでは、「御清之部」と題していることに基づき、林由紀子氏は「清め規定」と呼んでいる。綱吉政権は、神社の服忌令の穢に関する規定や、朝廷の服假制に付随するさまざまな触穢規定を取捨選択して、穢を忌避する厳しい法令を制定した。
- 47 貞享元年以前にも、幕府が用いていた服忌令が存在し、その一部が天海考定とされているところから、これを林由紀子氏は「天海系服忌令」とよぶ（『近世服忌令の研究』）。
- 48 平和の到来とともに権力の世襲が高まったとき、天道思想のバリエーションとして、吉田神道・山王神道などによって「神君思想」が創り出された。朱子学の理気論によって、寛永のころから「神君」は徳高くその「余慶」は永久に続くものと宣伝された（石田一良「前期幕藩体制のイデオロギーと朱子学の思想」『藤原惺窩 林羅山』日本思想体系23 一九七五）四四三～四四八頁。
- 49 曾根原理「『天道』から、徳川権力の荘嚴装置へ」（荻部直・片岡龍編『日本思想史ハンドブック』新書館、二〇〇八）。
- 50 「生類憐みの令」の発令時期については諸説あり、今なお定説化したものはない」（根岸光男『生類憐みの世界』四七～七九頁）。
- 51 綱吉が柳沢吉保に下賜した「観用教戒」に「如此則世將至悉不仁而如夷狄之風俗」という表現がある（『常憲院殿御実紀附録』巻中）。
- 52 一六八五（貞享二）年七月一日「御成被為遊候道筋江、犬猫出申候而も不苦候間、何方之御成之節も、犬猫つなき候事、可為無用者也」（『江戸町触集成』二三五六号）。
- 53 「細かな具体的指示をさみだれ式に降らせることによって、生類憐みの趣旨を浸透させようと図った綱吉の細かな通達は、今知られているだけでも一三五回にのぼり、それを研究上仮に『生類憐みの令』と総称している」（山室恭子『黄門さまと犬公方』文芸春秋、一九九八）一一九～五一頁。
- 54 塚本学『生類をめぐる政治―元禄のフォークロア―』（平凡社選書、一九八三）四八頁。
- 55 根崎光男前掲註5書五〇頁。
- 56 顔茂猷『迪吉録』については、酒井忠夫『増補中国善書の研究上』第五章 功過格の研究（四六二～四八二頁）参照。
- 57 「翟棼好食牛、生子不育、悔罪乃得嗣」（『迪吉録』巻八・二六、殺生門）。出典を『陰騭録』とする。
- 58 「唐都督李壽頻殺隣犬犬責命死」（『迪吉録』巻八・十

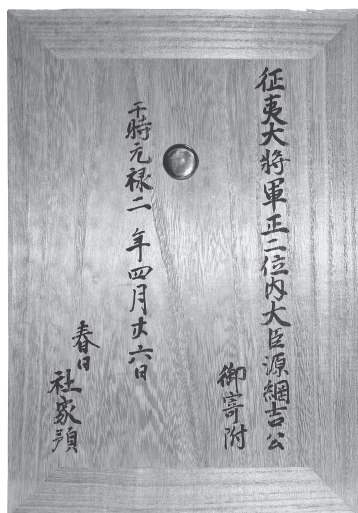
- 七)。「今昔物語」と同じ李壽の故事で、出典を『冥報記』とする(『四庫全書存目叢書』子部第一五〇冊、齊魯書社、一九九五所収、中国人民大学図書館蔵明末刻本影印、六五三頁)。
- 59 高雄義堅「雲棲寺株宏と明清仏教」(『中国仏教史論』京都、平楽寺書店、一九五二)、荒木見悟「戒殺放生思想の発展」(『陽明学の展開と仏教』研文出版、一九八四)二二五～二四三頁、桑谷祐顕「中国における放生思想の系譜」(『観山学院研究紀要』二二二号、二〇〇〇)九四頁等参照。
- 60 日本で多く流布している『自知録』は、袁黃の『陰陽録』との合刻本で、巻末に「元禄辛巳」と忍濃の年記を付す一七〇一(元禄一四)年の翻刻本である(酒井忠夫『増補中国善書の研究』下、二〇〇〇)。
- 61 『自知録』『近世漢籍叢刊一蓮池大師遺稿外』善門・五〇八二、過門・五〇八九頁。
- 62 『梵網經心地戒品菩薩戒義疏發隱』新纂大日本統藏經六〇巻、五〇〇頁上。
- 63 『假名草子集成』第十四巻(東京堂出版、一九九三)所収『戒殺放生文』影印及び小川武彦「浅井了意『戒殺物語・放生物語』と株宏『戒殺放生文』」。
- 64 小川武彦「『戒殺放生物語』一巻一、二「戒殺物語」の翻刻付解題 その一」(『跡見学園女子大学『国文学科報』六、一九七八)、同『戒殺放生物語』翻刻付解題一その二」(『国文学科報』七、一九七八)。
- 65 石黒吉次郎氏は「古代以来説話集などに散見していた殺生譚が、近世初期には一つのテーマとなって書にまとめられるようになったのであり、これは殺生譚収録の歴史においては画期的なことである」と述べる(石黒吉次郎「殺生譚の変貌(一)——中世説話から近世説話へ」『専修国文』第八一号、二〇〇七、後に同「中世の芸能・文学私論」(新典社、二〇一二)に収録)。
- 66 『假名草子集成』第二十八巻(東京堂出版、二〇〇〇)。
- 67 石黒吉次郎「殺生譚の変貌(三)——中世説話から近世説話へ」『専修国文』八二二号、二〇〇八)六〇頁。同「中世の芸能・文学私論」(新典社、二〇一二)に収録。
- 68 佐藤孝之「前掲註34論文、根岸光男『將軍の鷹狩り』(同成社、一九九九)六七～六九頁。
- 69 成海俊「江戸時代における勸善書『明心宝鑑』の受容と変容」(玉懸博之編『日本思想史——その普遍と特殊』ぺりかん社、一九九七)所収。
- 70 成海俊「日本の『明心宝鑑』受容の研究 特に五山僧を中心として」(『退溪學論叢』第一六輯、二〇一〇)。范立本編『新刊大字明心宝鑑』二巻、景泰五年跋がある。曲直瀬養安院旧蔵。現在、筑波大学附属図書館所蔵(『筑波大学と漢貴重圖書目録』四六)。
- 71 玉懸博之「松永尺五の思想と小瀬甫庵の思想」(原載『藤原惺窩 林羅山』日本思想体系、岩波書店、一九七五)、後に同『日本近世思想史研究』(ぺりかん社、二〇〇八)所収。
- 72 玉懸博之「小瀬甫庵の思想的営為とその後——近世思想史

- の構想」（『日本近世思想史研究』所収）。
- 73 『江戸文学』三八、福田安典監修「特集 中国小説と江戸文芸」、二〇〇八、徳田武『近世近代小説と中国白話文学』（汲古書院、二〇〇四）、同『秋成前後の中国白話小説』（勉誠出版、二〇一二）等。
- 74 玉懸博之「近世前期における神観念」及び同「小瀬甫庵の思想的営為とその後」（ともに『日本近世思想史研究』所収）。
- 75 『浅井了意全集 仮名草子編1』（岩田書院、二〇〇七）。
- 76 下出積興「南部草寿『太上感應篇俗解』解題」（『神道大系』一〇三、論説編一六 陰陽道、神道大系編纂会、一九八七）。
- 77 『羅山先生年譜』慶長九年甲辰にある「既見之書目」には『太上感應篇』は見えないが、『列仙伝』や『剪灯新話』と並んで『為善陰騭』や『勸善書』が見える。
- 78 『居家必用事類』癸集（巻一九、巻二〇）は謹心、警心と題して、養生、修養についての文章を収録し、警心には、『太上感應篇』本文の他に靈驗記を付し、淮海秦氏集の『勸善録』が続いている。和刻本『居家必用事類』については、長友千代治『江戸時代の書物と読書』（東京堂、二〇〇一）四 出版書とさまざまな、一五 和刻本『居家必用事類』参照。
- 79 慶應義塾大学斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』一～四（井上書房、一九六二～六四）。
- 80 長友千代治『紀州藩石橋家乗』読書記事抄録」（同
- 『近世の読書』日本書誌学大系五二 青裳堂書店、一九八七）一〇八頁。
- 81 人見竹洞『居家必用跋』（『人見竹洞詩文集』汲古書院影印、一九九二）三四五頁。湯谷祐三「京都所司代板倉重矩の知られざる出版活動―その思想と影響―」（『名古屋外国語大学外国語学部紀要』四五、二〇一三）参照。
- 82 『牧民忠告』には林羅山の写本があるが、福井保氏の「林羅山雑考」（同『内閣文庫書誌の研究』）によると元和・寛永頃に用いたらしい「道春」の蔵書印が捺されている（一五七頁）。
- 83 『荒政要覧』は明の俞汝爲編の救荒書で、林家旧蔵の和刻本がある（内閣文庫二九五―三三）。
- 84 笠井哲氏は、江戸時代初頭に現れ流布した「啓蒙書の『天道思想』は、神道、儒教、仏教の三教一致の上に立っている」と述べる（『近世武芸と天道思想』『武道学研究』日本武道学会、一九八九）。
- 85 善会とは中国前近代に生まれた自発的に運営される慈善団体（福祉結社）であり、善堂とはその施設或いは事務局を置く建物をいう。清代ではこれら善会、善堂を核として行う事業を「善挙」と呼ぶのが普通であった（夫馬進『中国善会善堂史研究』同朋舎出版、一九九七）三頁。
- 86 夫馬進氏は、祁彪佳『祁忠敏公日記』崇禎十三年七月六日の放生池の蝶を盗まれた「犯罪」に対し嚴重に究明することを知県に訴えた記事を引用して、飢えた人よりも、放生した蝶の生命を重しとする「転倒」を指摘している（前

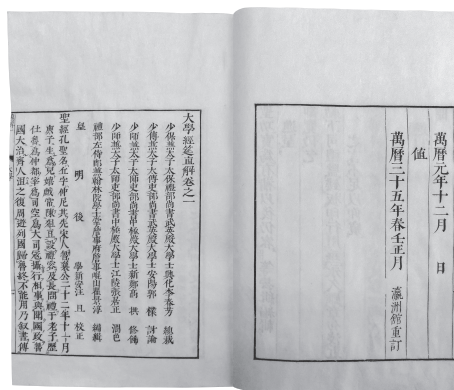
- 掲 『中国善会善堂史研究』 一六三頁。
- 87 『護国女太平記』 や 『三王外記』 等の綱吉誹謗の文献を林述斎が非難していたことを、松浦静山は『甲子夜話』 卷一九に記している（中村幸彦・中野三敏校訂『甲子夜話』 一、平凡社、一九七七） 三二六頁。
- 88 『御実紀』 卷二（『徳川実紀』 第五篇、三八一頁）。
- 89 『紅葉山御書庫日録』（『人見竹洞詩文集』）、『御実紀』 卷二（『徳川実紀』 第五篇、三八二頁）。
- 90 『御実紀』 卷三（『徳川実紀』 第五篇、四〇三頁）。
- 91 九月一日鳳岡と竹洞に韓國使節接遇の賞賜として時服が与えられた（『徳川実紀』 第五篇、四六一頁）。天和二年当時、竹洞は四六歳であり、林家一門の幕府儒者のなかでは最古参になっていた。寛文六年に鷲峰の長男春信が急逝し次男鳳岡が林家を継いだ、竹洞より七歳年下であった。家格の上では鳳岡が儒職の総裁であったが、実質的には竹洞が中心になって通信使の応接に務めた。なお、『人見竹洞詩文集』 後集第四冊附録には竹洞と通信使の間に交わされた筆談の記録「韓使手口録」を収める。
- 92 『御実紀』 卷八（『徳川実紀』 第五篇、四九九頁）。
- 93 『御実紀』 卷二四（『徳川実紀』 第五篇、五八五頁）。
- 94 小沢栄一「近世史学の形成と林鷲峰」（『東京学芸大学紀要』 第二二集第三部門、一九七〇）。
- 95 藤實久美子「近世書籍文化論―史料論的アプローチ―」（吉川弘文館、二〇〇六） 九二頁。
- 96 江戸幕府刊行物は、それぞれ將軍の好尚を反映したものであるが、家康・吉宗の刊行物は、兵書や仏書、薬劑の処方集等と多様なものに対して、綱吉の刊行物は経書のみで比較的単純なのが特徴である。
- 97 『神宮文庫図書目録』（一九二二年）に『四書直解』 四部の著録があり（一六五頁）、『四書直解 明 瞿景淳編 刊 二〇冊 三四一』 が進献本である。神宮文庫本について直接調査された皇学館大学堀内淳一氏のご教示によると、この『四書経筵直解』（三四一）には「内殿之印」「神宮文庫」の印が捺されており、内宮文殿（内殿）に奉納されたことが確認できること、また「五代將軍綱吉 元禄元年納」と朱筆で記された紙片が挟まれていることが判明した。版式・匡郭の寸法とも後述の春日大社本と同じである。また、同（三四二）と同（三四三）は全く同じ版で「神宮文庫」印の他に外宮に由来する「宮崎文庫」の印が捺されているが、同（三四三）は寸法が一回り小さい（縦二七・〇cm×横一七・5cm）。
- 98 「日光」（東照宮）は『東照宮寶物志』に「文政九年焼失」とあり、「山王」（日枝神社）・鶴岡（鶴岡八幡宮）は現在目録等からは確認できず、「上野」（寛永寺）は（戦災で焼失か、高橋執事回答）、「増上寺」は（目録には見えず、昭和二〇年に焼失か、出版課古橋氏回答）により、綱吉が奉納した『四書経筵直解』は消失した可能性が高い。
- 99 藤井讓治「徳川綱吉奉納の『四書直解』（その二）（天満宮歴史の一齣）」社報『天満宮』 四六六（平成二四年五月一日）、同「徳川綱吉奉納の『四書直解』（その二）（天

- 満宮歴史の一齣」社報『天満宮』四六七（平成二四年六月一日）。
- 100 徳川記念財団・東京都江戸東京博物館編『徳川綱吉とその時代 泰平の中の転換』（徳川記念財団、二〇〇九）四〇頁〔作品番号60〕。
- 101 張居正（一五二五〜八二）は、万暦帝の元で強力な指導力を發揮して明の政治改革を推し進め財政再建に成功したが、一方で強引なやり方は恨みを買い、死後に家産を没収される等の処分をうけた。
- 102 『重刻内府原板張閣老経筵四書直解指南』二七卷、市立米沢図書館所蔵本は『米沢善本の研究と解題』（臨川書店、一九八八）に紹介されている（一二六頁）ほか、米沢善本完全デジタルライブラリーで画像が公開されている。
- 103 国立公文書館内閣文庫林（大学頭）家旧蔵本『四書経筵直解』二〇卷二〇冊（二七七一五五）は、縹色表紙（煤汚れあり）、縦三一・二cm×横二一・五cm、五針装、版式は四周单辺、匡郭内縦二〇・八cm×横一五・九cm、白口单魚尾、每半葉十三行二三字、無界。
- 104 松栢堂、林勘左衛門は林羅山の縁者で幕府の御書物師をつとめた二代目。元禄頃に江戸に出店し、『武鑑』などを出版した（井上隆明『改訂増補近世書林板元総覧』青裳堂出版、一九九八）。出雲寺和泉掾松栢堂重印本は全国漢籍データベースによれば、伊那市立高遠町図書館及び愛知大学に所蔵がある。これと別に、明万暦三五年瀛洲館重訂本に訓点をつけた宝暦四年刊本がある（館林市立図書館、秋元文庫七一〜一二）。
- 105 福井保『江戸幕府刊行物』（雄松堂出版、一九八五）五九〜六八頁。
- 106 福井保前掲註105書六六頁。
- 107 長澤規矩也・長澤孝三編著『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』（汲古書院、二〇〇六）。
- 108 福井保前掲註105書六八頁。
- 109 前掲註100『徳川綱吉とその時代 泰平の中の転換』（作品番号59）。
- 110 『江坤輿』については不詳だが、福建の建陽刊本と思われる。綱吉が明末の福建刊の中箱本を所持していたことは、隠元や即非など福建の黄檗関係者の渡来と重ねあわせると興味深い。
- 111 塚本学前掲註9書一六四〜一七一頁。
- 112 鷹狩りは狩猟のために行われるだけでなく、民衆生活を把握する役割もある。綱吉は館林藩主時代の後半から鷹狩りを行わなくなり、将軍就任後も鷹狩りに出かけることはなかった。このことは綱吉の強い決意を感じさせるが、鷹匠の鷹遣いを全面的に禁止していたわけでもなく、放鷹制度は縮小されたものの天皇への鷹の鶴献上を含む鷹儀礼も継続していた（根岸光男『将軍の鷹狩り』）。
- 113 佐藤豊三『将軍家「御成」について（8）―徳川将軍家の御成 その三―』（『金鯢叢書第十一輯』徳川黎明会、一九八四）。
- 114 大石学『将軍綱吉の柳沢邸御成り』（大石学編『高家前

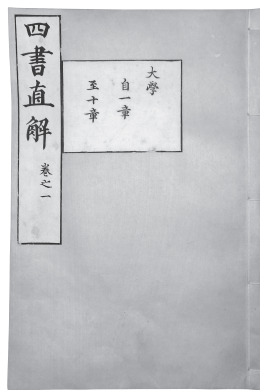
- 田家の総合的研究―近世官僚制とアーカイブズ― 東京堂出版、二〇〇八。
- 115 大橋毅顕『將軍綱吉の牧野邸御成り』（大石学編『高家前田家の総合的研究―近世官僚制とアーカイブズ― 東京堂出版、二〇〇八）。
- 116 『孟子』公孫丑上「善きことは人と同にす（善与人同）」は、同じ章句では「人とともに善を為す（与人為善）」とも言い換えている。
- 117 夫馬進前掲註85書一八〇頁。
- 118 中野三敏『十八世紀の江戸文芸』（岩波書店、一九九九）二、都市文化の成熟―明風の受容。また、『江戸時代初期出版年表』（勉誠出版、二〇一一）には、承応四年（明暦元年）刊の『黄檗隠元和尚全録』及び『黄檗隠元禪師又録』（五四三頁）や『隠元禪師語録』（五五四頁）、『隠元和尚語録』（五五八頁）等、隠元来日の影響をうけて和刻本が作られたことがわかる。
- 119 中野三敏前掲註118書。
- 120 永井英治「中世における殺生禁断の展開」（『年報中世史研究』第18号、一九九三）。
- 121 西村玲「不殺生と放生会」（東洋大学「エコ・フィロソフィ」研究 第六号、二〇一二）。
- 122 隠元に從つて長崎に渡来。隠元の黄檗山万福寺開創に従い、ほどなく印可を受け、遠州浜松の初山宝林寺開山となった。また上州の二山国瑞寺を開創、ついで宇治黄檗山万福寺第四代住持となり、晩年塔頭獅子林に住した。浄土教を兼修し、「念仏独湛」と称された（『浜松にもたらされた黄檗文化』浜松市博物館、二〇一四）。
- 123 夫馬進前掲註85書一五三頁。明末清初に流行した放生がいかに盛んであつたかは、「江南の人で放生の教えを信奉している者は、十家のうちで五家ある」とも記す同時代の史料もあつた（陳洪綬『題商網思放生冊』）。
- 124 夫馬進前掲註85書一六二頁。
- 125 夫馬進前掲註85書一六三―一六四頁。
- 126 渡辺浩『東アジアの王権と思想』（東京大学出版会、一九九七）四〇―四六頁。
- 127 野村玄「天和・貞享期の綱吉政権と天皇」（『史林』第九三巻六号、二〇一〇）。
- 128 杉岳志「徳川將軍と天変―家綱―吉宗期を中心に―」（『歴史評論』六六九号、二〇〇六年一月号）。
- 129 「釈迦孔子之道、專慈悲要仁愛、勸善懲惡、真若車両輪、最可篤恭敬者也。然学仏道者、泥経録之說、離君遺親、出家遁世而欲得其道。如此則世將至悉乱五倫、是可恐之甚也。学儒道者、泥経伝之言、祭或常食用禽獸、是以不厭害萬物之生。如此則世將至悉不仁、而如夷狄之風俗、是可恐之甚也。学儒仏者、不可失其本矣。」（『御実紀附録』卷中（『徳川実紀』第六篇七四二頁））。
- 130 浅井了意『戒殺放生物語』『戒殺物語』『一戒殺の事』には、「それ、殺生といふハ、殺生を、いましむるの事也。儒教にハ、仁と名づけ。仏書にハ、慈悲と名づく」（『假名草子集成第十三巻』東京堂出版、一九九二年）とある。



徳川綱吉寄進『四書経筵直解』
内箱蓋裏墨書 奈良 春日大社蔵



『四書経筵直解』巻之一



巻之一「大学」表紙

131 『御実紀附録』巻中〔徳川実紀〕第六篇、七三五頁。

〔附記〕 本稿作成に際し春日大社をはじめ関係各処の方々に様々な便宜を図っていただきました。ここに記して御礼申し上げます。

なお、本稿は学習院大学外国語教育研究センター二〇一二年研究プロジェクト「江戸時代の漢籍の渡来とその影響の研究―徳川綱吉関係の漢籍を中心に―」（代表 大澤顯浩）による研究成果の一部である。